

第3回福井県高等学校教育問題協議会 議事概要

- 1 日時 令和2年6月1日(月) 13時30分～15時00分
- 2 場所 国際交流会館3F 特別会議室
- 3 議事概要

I 高校教育の現状と課題について

荒瀬委員：答申(案)の「国の改革の動き」について、追加をお願いしたい。中教審では文科省から「新しい時代の初等中等教育の在り方」について諮問を受け、現在、特別部会を設置し検討中である。

教育委員会は、地域のバランス等も考慮し学校と話し合っ「スクール・ミッション」を決めていく、一方で、各学校はスクール・ミッションに基づいて、教育課程や卒業生の姿、生徒募集の有り様を「スクールポリシー」として定めてはどうか、という二つの軸でもって検討している。

今回のコロナウイルスの感染で学校が休校となり、いろいろな取組みが行われている。一つの授業に複数の学校の相当数の生徒と教員も関わって、本来ならできないような例えば関西の学校の授業で、北海道の先生や九州の先生が参加して、いろいろな内容を指導したり、自分の取組みを公開したりしている。学校の中だけで、学びを閉じ込めておく必要はなく、これを今後の展開に生かしていくことを考える必要がある。

荻原委員：1学級当たりの生徒数は普通科高校においても30人規模くらいに斬新的に落としていく必要があるのではないか。1クラス当たりの生徒数を思い切って落として、一人ひとりの生徒たち、普通科の生徒たちであっても手をかけていくということが必要。

徳前委員：ネット配信等について教育庁で音頭をとり、遠隔教育、生徒視点でいうと主体的に学べるようなコンテンツを作っていただいて、福井市の高校生のみならず嶺南、奥越の高校生が見られるようにする。空いた時間で、本来の好奇心に基づいて学ぶ、あるいは少人数にして尖った人材を育成してほしい。また県外出身の高校生を集めようとする、いろんな背景を持って育ってきた高校生と一緒に教えることになる。先生方の負担もある程度は考えられる。1クラス当たり的人数をできるだけ抑えるということでも賛成である。

II 高校教育のこれまでの取組み

稲山委員：職業系教育の長期実習等について、前から思っているのは富山県の高岡市は地場産業に銅とか漆器があり、高校生が銅器メーカー、漆器メーカーで出向いて実際にものづくりの体験をしてそれが単位認定される。地場産業や知らなかった現状に気がつくということで、本県も地場産業と一体化した教育を職業系教育で、より一層取り入れていただけるとありがたい。フューチャーマイスター制度は即戦力の一助になっている。これを励みに取組みがさらに伸ばせるといいかなと考える。

草桶委員：以前石川県の職業系高校を見学した。校舎や設備等が素晴らしいと感じた。本県の県立高校の校舎は私立高校と比較しても中学生に本当に魅力ある高校だというふうにアピールできるものなのか疑問を持っている。十分なスタッフで生徒に向き合った指導というのが最も効果的であると考える。

III 県立高校の魅力化に向けた目指すべき方向性

石井委員：中学校の特別支援学級や通常学級に在籍している「特別なニーズのある」中学生は高等学校に来る。国内では高等学校が小中と比べ、特別支援教育が遅れているという研究がいくつも出ている。教育県として足元の生徒たちのやる気を引き出しながら、もっている可能性を育てる対象として、特別支援も入れていただきたい。

荒瀬委員：SDGs の取組みは国をあげて、世界中で、2030年に向けて取り組もうという大事な取組みで「誰ひとり取り残さない」という合言葉も含めて重視されている。そういった内容を、3つにカテゴライズする前の頭の部分に、特別支援教育などと合わせて取り出していただけとおさまりがいいのではないかと。

津田委員：本答申で何をいちばん強く発信するかということが大切なのではないかと思う。もちろんすべて書くことが必要なのかもしれないが、ひとつ何かといわれれば何なのかということを出してほしい。

また、メディアをもっと使って地域全体に発信していくとよいと思う。時々高校生の活動を目にすることがあるが、見えていないところもある。

田村委員：SSH4校の生徒たちが外部に出た後、戻ってきて、職業系高校を出た生徒たちと交流の機会があればいいと思う。

津田委員：この学校のこの先生に授業を受けたい等、また授業名人の先生もおられる。そういう魅力のある先生の授業を受けられるシステムが必要かと思う。

小和田委員：遠隔授業をやっているが、一律の授業スタイルをそのまま動画配信するのではなく、子どもたちの自発的な学習を研究、改善したほうが良い。

徳前委員：職業系高校の魅力発信に関して、農業とか工業とか、本当に魅力がきちんと伝わっているのかという心配がある。地場産業や農業についての魅力を動画等で上手に発信することで、卒業後にすぐに就職だけでなく、進学につなぐことも重要ではないか。

荒瀬委員：生徒同士の交流をどれだけやっているかは、具体的な経験として、子どもたちの中に残り、将来にわたって非常に意味を持つと思う。SSHと工業高校の生徒たちが同じ会場で発表会を行い、交流することは、高校生の考え方の幅を広げていくというのはあると思う。

また、福井県のSSH校は全国的に有名で、取組みの先進性がものすごく評価されている。例えば、藤島高校作成の冊子や若狭高校海洋科学科の鯖缶など、生徒への長年の指導のもとこれらが誕生する経緯で、その地道な取組みがあることを、福井県は様々な形で全国に発信していただきたい。

藤岡会長：答申として高校の魅力化という言葉を使い、推し進めることはとてもすごいことである。

他の都道府県でも高校魅力化の話はあるが、地元の市町村と高校が組み、県はあまり関知しない。県として、高校の魅力化や地域の人材を育成すること、それを普通科系高校、職業系高校、SSH校でもすることは、非常に先進的だと思う。

これらを実現する上で、市町の支援が必要である。ここまで県が推している、市町は何もやらなくていいと思いがちであるが、コーディネーターの派遣や学生寮や下宿、自習室の整備など、県のみならず地域の市町の応援が必要になってくる。